「西方の人」を読む（一）

――「罪の女」をめぐって――（上）

堀　竜一

一

芥川龍之介「西方の人」及び「続西方の人」は難解なテクストである。「新約聖書」の主に福音書に依拠しながら、「わたしのクリスト」（〈1　この人を見よ〉）を描いた芥川最晩年のこの作品の難解さの原因は、文章の論理の飛躍の多さ、宗教的言語と文学的言語との齟齬、さらには死を目前に予感した人間の内面的なゆれ等々、さまざまなレベルで考えられるかもしれない。ともかく、解釈に苦しむ多くの箇所のうち、以下ではその一つの箇所の解釈を試みることにしよう。それは「西方の人」〈20　エホバ〉の末尾、フランチェスカに関する箇所である。〈20　エホバ〉の全文を引用すべきだろうが、まずは当該の箇所のみ本文を示しておく。

ダンテはフランチエスカを地獄に堕した。が、いつかこの女人を炎の中から救つてゐた。一度でも悔い改めたものは――美しい一瞬間を持つたものはいつも「限りなき命」に入つてゐる。感傷主義の神と呼ばれ易いのも恐らくはかう云ふ事実の為であらう。

まず「西方の人」の本文について。芥川生前の本文は、原稿、『改造』昭和二年八月号初出本文、その切抜きへの著者訂正書入れ（日本近代文学館蔵）の三種類がある。原稿については不明[1]、初出本文及び著者訂正書入れは未見につき、初出形を底本とし、著者訂正書入れとの異同を校異で示す〔新〕（本稿末尾略号参照）と、著者訂正書入れを底本とし、初出形との異同を校異で示す〔前〕とを対照し、推定する（ただし、〔前〕には多少の見落しがあるよう）。引用の箇所については、一箇所、「入つてゐる」のルビが、［元］［西］［普］は「い」とするのに対し、〔前〕のみ「はひ」とする（［小］［新］はルビなし）。その他多くの箇所について諸本間で不可解な不一致がまま見られる。本文決定上の揺れであるが、今回はこの点には触れない。

「西方の人」「続西方の人」についての注釈の類はいくつか出ている。吉田（本稿末尾略号参照）が、自負する通り「基礎的」（「注釈者あとがき」）な注釈と言える。全集のほとんどすべての本文に注釈を施した〔新〕は、こと「西方の人」「続西方の人」に関しては（浅野）、ほとんど吉田を出ない。また「聖書は芥川愛蔵（一九一四年一月、米国聖書協会刊）と同じ版」に基づく（三五〇頁下）としながらも、大正改訳の［文］（本稿末尾略号参照）の本文を引用している。芥川が「西方の人」「続西方の人」執筆に当たり参照した『聖書』は、いわゆる『明治訳聖書』とされ、関口安義『この人を見よ　芥川龍之介と聖書』（小沢書店、一九九五・七）、佐藤等、この点に言及した文献は少なくない。実際、「聖書引用は芥川愛用の元訳聖書による」とする佐藤が示す『聖書』本文と［明］はほぼ一致し（微妙な差異はある）、芥川の引用文ともよく一致する。その佐藤は、信用のおける本格的な注釈だが、残念なことに、「西方の人」1～3、18、28、36、37、「続西方の人」8、11、22に止まる。今回の箇所はこの注釈の対象外であるが、佐藤の示唆に富む点の一つは、先の芥川の『明治訳聖書』及び、旧制第一高等学校時代に友人の井川恭から贈られた『英訳聖書』[2]の両方に直接当たり、芥川が『明治訳聖書』には黒及び赤の鉛筆で、『英訳聖書』については赤インクで傍線を引いた箇所を逐一指摘していることである。今回は［明］を芥川が用いた『聖書』本文と想定して考察する（参照した二種類の［明］本文、特にルビに微妙な異同が存在することからも、芥川の『明治訳聖書』と完全には一致しないかもしれないが）。

二

「ダンテはフランチエスカを地獄に堕した。」というのはさして注釈の難しい箇所ではない。「フランチェスカはその〔＝ダンテの〕代表作『神曲』の地獄篇で、姦通の罪を犯して第二獄におとされた女性」（吉田）という程度の簡略な注釈で済みそうだが、問題は次の一文、「が、いつかこの女人を炎の中から救つてゐた」、これは『神曲』の叙述に反する。フランチェスカは『神曲』「地獄篇」第五歌に登場する女性で、『神曲』のこの箇所は以後のヨーロッパ文学における「パオロとフランチェスカ」物語の原型になったエピソードである。地獄の第二の圏谷[3]においてダンテ（登場人物の）は、二人の魂、特にフランチェスカの魂から悲恋の次第について話を聞き、「哀憐の情に打たれ／私は死ぬかと思う間に、気を失い、／死体の倒れるごとく、どうと倒れた」。ここで「地獄篇」第五歌が終り、第六歌は「この義姉と弟の哀れな物語に／私は悲しみに心千々に乱れ、／意識を失って倒れたが、気がついてみると、／私のまわりは、前へ出ても、横を向いても／またいずこを見ても、およそ見たためしもない呵責と／呵責にさいなまれる人ばかりだった。」と、二人の面影を後に場所は地獄の第三の圏谷に移っている。ここには空間的にも心理的にも断絶がある。「煉獄篇」「天国篇」を含め、「フランチェ

スカ Francesca（da Rimini）」の名前が見られるのはこの一連の箇所のみであり、パオロに至っては名前はまったく現れない。固有名詞を用いないにしても、この二人に言及しているのはやはり、「地獄篇」第六歌三行目まで（つまり第五歌七三行目から始まり、七三行分）なのである。そもそもこの二人は「風 vento」に吹き流され漂っている魂であり、それゆえに求めに応じてダンテのもとへやって来る二人は、「帰りたくなると、翼をはって／大空を自分の思い通りによぎり、／いこいの巣へ舞い戻る」「鳩 colombe」になぞらえられているのに、「炎」という「火」の表象系の中にフランチェスカを置くとはどういうことなのか。ましてやそのフランチェスカを（芥川の文脈からいって、おそらく、作者あるいは語り手であるダンテが）「救つてゐた」とは不可解である。しかも「が、いつか～（救つて）ゐた」というのは、『神曲』のテクスト中に具体的な場面として描かれてはいないが、事実上、象徴的にか比喩的にそのような救済をフランチェスカに与えた、とでも読めそうである。

実際、吉田はここで興味深い注釈を施している。この箇所はオスカー・ワイルドの『獄中記』を念頭に置いた表現であるという。即ち、「クリストが罪から救った人々は、その生涯のうちに美しい瞬間があったという、ただそのことのゆえに救われたのだ。マグダラのマリアはクリストに出会った時、七人の恋人のひとりがくれた高価な石膏の壺を毀ち、芳わしい香油をクリストの疲れ埃にまみれた足に塗ったのだ。そしてこの一瞬のゆえにこそ、この女はルツやベアトリーチェと並んで、天国の雪のように白いばらの花弁の間に坐るのだ」（補注一二四）。吉田の指摘通り、芥川のテクストの「一度でも悔い改めたものは――美しい一瞬間を持つたものはいつも「限りなき命」に入つてゐる。」は、ワイルドの当の箇所に拠っているのは確かだが、ワイルドがこの箇所を「マグダラのマリア」について叙述しているのに対して、なぜ芥川はそれを「フランチエスカ」に置き換えているのだろうか。フランチェスカは「悔い改めた」のであろうか。表面的には、「ベアトリーチェ」から、当然のことながらダンテ及び『神曲』が連想され、かつ「天国の雪のように白いばらの花弁」が実際、『神曲』「天国篇」の第十の至高天を直接指し示しているからと理解できる。しかし、芥川のテクストにおいて、「一度でも悔い改めたものは――美しい一瞬間を持つたものは」ということが話題の中心なのだとすれば、何もワイルドがマグダラのマリアについて語っていることを、フランチェスカに置き換えることはないだろう。それとも、『神曲』にはマグダラのマリアなどは登場せず、まして彼女が「救われ」て「天国の雪のように白いばらの花弁の間に坐る」ことも記述されていないのだから、マグダラのマリアよりもフランチェスカこそワイルドの文脈にふさわしいとでも芥川は考えたのであろうか。以下、この問題を考察して行くが、まず芥川の『獄中記』読書について簡単に触れておく。

芥川蔵書中、**Wilde, Oscar.** ☆De profundis. 15th ed. Lon-

don, Methuen, 1911.（Methuen's shilling books）が見える。[4]芥川は早い時期、第一高等学校在学時から東京帝大入学前後にかけてワイルドを集中的に読んでいる。『獄中記』についても、その当時読んだことが、府立三中後輩の浅野三千三宛大正二年八月十二日付書簡で確認できるが、[5]上記の版がそれであろう。吉田はこの箇所以外にも、〈18　クリスト教〉の「ロマン主義者の第一人」（従って、〈11　ヨハネ〉の「ロマン主義者」も）、〈20　エホバ〉の当の箇所より少し前の「詩的正義」、〈34　クリストの友だち〉の「ヨハネの首を…」（ただし、『サロメ』の影響。「続西方の人」〈21　文化的なクリスト〉も関連）でもワイルドの影響を指摘しているが（浅野はこれに〈18　クリスト教〉の「喇叭の声」「近代のやつと…」を補足する程度で、他はほぼ同様）、その点からしても、「西方の人」執筆に先立って、どの時期か確定できないが、『獄中記』を読み直したものと思われる。

『獄中記』の成立はかなり複雑である。ワイルドが同性愛の関係にあったアルフレッド・ダグラスの父親クィーンズベリー侯爵を相手取った訴訟に敗れ、不名誉の獄中生活を送った二年間の終り近く、一八九七年一月から三月まで、当のアルフレッド・ダグラスに宛てて書かれた手紙ではあるが、一九〇〇年のワイルドの死後、一九〇五年にロバート・ロスの手により削除版として刊行された。その後の未削除版（完本）を巡ってのイギリス本国だけでなく、ヨーロッパ各国語での、米国での刊行等、込み入った経緯がある。いずれにしても、芥川蔵書は基本的に初版の削除版であり、FC（本稿末尾略号参照）の本文は芥川の読んだ本文とほぼ同一と思われる。以下『獄中記』の本文はFCに拠るが、完本であるSL及びPCとは同一箇所でも（SLとPC間でも）本文に多少の異同が見られる。

さて、ワイルドのテクストは次の通りである。Those whom he saved from their sins are saved simply for beautiful moments in their lives. Mary Magdalen, when she sees Christ, breaks the rich vase of alabaster that one of her seven lovers had given her, and spills the odorous spices over his tired dusty feet, and for that one moment's sake sits for ever with Ruth and Beatrice in the tresses of the snow-white rose of Paradise.（一一三三頁）SLが『獄中記』の原稿である、アルフレッド・ダグラス（ボジー）宛書簡の同一の箇所に付している注釈は、「ダンテ、「天国篇」、第三〇～三二歌参照」という簡単なもの（一一四頁注1）。また網羅的な注を持つ西村にしても、「マグダラのマリア」「ルツ」「ベアトリーチェ」「雪のように白い……すわるのである」の四箇所に注を施しているものの（注430～433）、とりたてて『神曲』の記述とのずれには触れていないし、そもそも『聖書』とのずれもあるのだが、[6]両者はこの点にも触れていない。即ち、前半のマグダラのマリアがイエスの足に香油を塗ったというのは、『新約聖書』中、「マタイによる福音書」二六章六～一三節（以下「マタイ」二六6-13といった具合に略記）、「マルコ」一

四3-9、「ヨハネ」一二1-8に共通に描かれる部分と、「ルカ」七36-50との二箇所がさしあたり関連するだろう。

ワイルドの獄中生活の時点で『英訳聖書』はAVとその改訂訳であるRV（新約一八八一年）が出ている。ワイルドが獄中生活以前にRVに目を通していたのは確かだが[7]、ここではひとまず当の箇所をAVの本文を示しながら見ることにする（以下、特に断らない限り『新約聖書』の日本語訳本文は［岩］を示す）。「マルコ」一四3以下、「マタイ」二六6以下の並行記事はともに、おそらく過越祭の二日前、エルサレム郊外のベタニアの癩病人シモンの家での出来事とする。「きわめて高い値の、純正のナルド香油の入った石膏の壺を持った一人の女がやって来て、その石膏の壺を砕き、彼の頭に［香油を］注ぎ始めた。there came a woman having an alabaster box of ointment of spikenard very precious; and she brake the box, and poured it on his head.」（「マルコ」一四3）、「高価な香油の入った石膏の壺を持った一人の女が彼に近寄って来て、食事の席についている彼の頭の上に注ぎ始めた。There came unto him a woman having an alabaster box of very precious ointment, and poured it on his head, as he sat at meat.」（「マタイ」二六7）。「ヨハネ」一二1以下は、過越祭の六日前、ベタニアでの出来事。イエスが甦らせたラザロも同席する。「さて、マリヤが純粋で高価なナルド香油一リトラを取ってイエスの足に注ぎ、自分の髪でその足を拭った。家は香油の香りで満たされた。Then took Mary a pound of ointment of spikenard, very costly, and anointed the feet of Jesus, and wiped his feet with her hair: and the house was filled with the odour of the ointment.」（一二3）。すでに一一2で「マリヤは主に香油を注ぎ、その足を自分の髪で拭った人である。It was that Mary which anointed the Lord with ointment, and wiped his feet with her hair,」と、先取りする形で言われている。「マタイ」は「マルコ」より簡略だが、いずれも「（ベタニアの）女」は特定されていず、彼女はイエスの頭に香油を注ぐ。「ヨハネ」では「女」は、マルタとラザロの姉妹である（ベタニアの）マリアとされる。彼女はイエスの頭にでなく足に香油を注ぎ、さらに髪で拭う。

次に「ルカ」の用例であるが、「すると見よ、その町の罪人であった一人の女が、（中略）香油の［入った］石膏の壺を持って来て、後方から彼の足もとに進み出、泣きながら、涙で彼の両足を濡らし始め、自分の髪の毛で［それをいくども］拭き、さらには彼の両足に接吻し続け、また［くり返し］香油を塗った。And, behold, a woman in the city, which was a sinner, (...) brought an alabaster box of ointment, And stood at his feet behind him weeping, and began to wash his feet with tears, and did wipe them with the hairs of her head, and kissed his feet, and anointed them with the ointment.」（七37-38）。ルカはこのファリサイ人のシモンの家での出来事を、受難の週の出来事ではなく、宣教における一挿話（しかも、洗礼者ヨハネの使いを受けての出来事に続けて語られ

ているので、宣教の早い時期の）として描いている。女は、イエスに香油を塗る（注ぐ）に先立ち（あるいは、並行して）、涙で濡らしたイエスの足を髪で拭いたり、足に接吻したりする。

「（壺を）砕き」というワイルドの表現は「マルコ」にのみ見える。イエスの足に香油を注いだとワイルドがするのは、「ヨハネ」と「ルカ」に合致するが、ワイルドは「髪で拭った」とは記していない。「壺」もワイルドは vase とするが、AVは box、RVは cruse（ともに「マルコ」「マタイ」「ルカ」とも。「ヨハネ」には「壺」は現れない）。また、ワイルドが rich（vase）とする形容語は、AVは very precious（「マルコ」「マタイ」）、very costly（「ヨハネ」）、RVは very costly（「マルコ」）、exceeding precious（「マタイ」）、very precious（「ヨハネ」）であるが（「ルカ」はこの形容語を欠く）、いずれもワイルドと異なり「香油」にかけている。ワイルドが spills the odorous spices としている箇所。「香油」に当たる単語は、AV、RVとも四福音書でおおむね ointment を当てる。問題は spill で、「マルコ」「マタイ」とも pour、「ヨハネ」「ルカ」は anoint とする。anoint は「油を塗って聖別する」という意味を持ち（anoint された者が「キリスト＝メシア」である）、anoint his（＝Jesus）feet with the ointment（of spikenard）と畳みかけることで、より宗教的意味合いを強調している。一方、ワイルドの spill は、誤って、偶然こぼすというニュアンスである。pour は、女性の意図を感じさせ、「頭に」でも不自然ではないかもしれないが、spill では「頭に」というはずもない。また吉田の引用文で「（香油を）塗る」としているのは、anoint ならともかく、いささかニュアンスのずれを感じる。西村訳（完本もこの箇所はほぼ同一本文）では「かれの疲れた、埃まみれの足に芳しい香油を滴らす」（一一五頁）であるが、女性が意図してといったニュアンスの訳になっている。

以上見てきたように、ワイルドの表現は、四福音書のAV、RVのいずれとも厳密には一致しない。かと言って、記憶のみで（手元に『聖書』も置かず）この箇所を執筆したわけでもないだろう。ワイルドは獄中で少なくとも二種類の『聖書』を手にしている。一つは『英訳聖書』、もう一つは『ギリシア語聖書』である。『獄中記』の記述に従うなら、ワイルドが『ギリシア語聖書 a Greek Testament』を入手したのは、一八九六年クリスマス頃（一一一頁）。ワイルド引用の『聖書』本文をAV、RVと照合してみると、『ギリシア語聖書』入手以前はほぼAVないしRVに拠り、それ以後は『ギリシア語聖書』に即しながら自由に訳しているようである。獄中でのワイルドの図書入手については一八九六年三月十日付ロバート・ロス宛書簡（レディング監獄より）に付されたSL一三九頁注4、西村注800、エルマン『オスカー・ワイルド』（Richard Ellmann, Oscar Wilde, Hamish Hamilton, 1987.）四六五頁、及び一八九六年七月二日付内務大臣宛書簡（レディング監獄より）に付されたSL一四五頁注2、エルマン四七

六〜四七八頁で詳細に書目が列挙されている。獄中でのダンテ読書やルナンへの関心を知る上でも興味深いが、今回は一切触れない（『ギリシア語聖書』本文についても特定しえない）。いずれにしてもワイルドが、イエスに香油を注いだその美しい一瞬ゆえに、マグダラのマリアは罪から赦されたとするのは、もともと「マグダラのマリアが［「ルカ」］七・三六以下の罪深い女と同一人であるという後世の教会伝承は、聖書に根拠がない[8]」にしても、後述するような伝統的なマグダラのマリア像から、「マルコ」「マタイ」のベタニアの無名の女、「ヨハネ」のベタニアのマリア（三者は「罪の女」とは明示されていない）、「ルカ」の「罪の女」（及び「ルカ」一〇38-42のマルタの姉妹マリヤム＝マリア）をマグダラのマリアと同一視したためであり、しかも「ルカ」の「おそらく売春婦[9]」である「罪の女」の「罪」を、その同一視ゆえにワイルドはマグダラのマリアに付与しているのである。

三

ここでもう一つのマグダラのマリアに関連する物語に目を転じてみよう。それはアナトール・フランスの「ラエタ・アキリア」である。これは芥川の「おしの」（初出『中央公論』大正一二・四、［新］X）の典拠とされている作品である。「西方の人」に四年程先立つ「おしの」は、「キリシタン物」の一つで、イエスの十字架上での最後の言葉「エリ、エリ、ラマサバクタニ（わが神、わが神、何ぞ我を捨て給ふや？）」を「宗旨」の要とするキリスト教を、「臆病ものを崇める宗旨」と拒否する「武家の女房」である日本人の女・おしのを描いた作品である。「ラエタ・アキリア」は、ティベリウス帝の時代（西暦一四〜三七年）、マルセイユが舞台、ローマの騎士の妻であるラエタ・アキリアが、寺院で出会ったマリア・マドレーヌ（ユダヤ人の女性）からイエスの深い愛、ことに、若い母親に抱かれた幼子達への愛と女達への慈愛とについて聞かされ、子を授けられることを条件に、マドレーヌの神を讃美し、貧しいキリスト教徒たちを保護することを約束する。六か月後に、身籠ったアキリアの前に現れ、彼女を信仰へ導くために、イエスの受難と復活とがすべての人の救いのためになされたことを語るマドレーヌに、「苦い嫉妬と暗い後悔と」を感じたアキリアは拒絶の烈しい言葉を浴びせ、追い出す。その後、マドレーヌはサント・ボーム（聖洞窟）に身を隠し、アキリアは数年後にキリスト教に改宗したというもの。

この作品は短篇集『バルタザール』に収録されているが、言うまでもなく、この短篇集の巻頭の短篇「バルタザール」の英訳からの重訳（「バルタザアル」）は芥川の文学活動の始めに位置づけられ、この短篇集の二番目の短篇「司祭の木犀草」は芥川の最初の「キリシタン物」である「煙草と悪魔」で言及されている。エルネスト・ルナンの息子の画家アリ・ルナンへの献辞を持つ「ラエタ・アキリア」は、『カトリック教会聖務日課書』の聖女マルタの祝日（七月二十九日）等の聖女マルタ・聖ラザロ・聖マリア・マドレーヌに関する諸

伝説、及び『黄金伝説』に主に依拠している。[10] ジェノヴァの大司教を務めたヤコブス・デ・ウォラギネによって十三世紀後半編集された『黄金伝説』が、後に各国語に翻訳され（内容もかなり入れ換えられ）、その英訳本であるカクストン訳を芥川が愛読したこと、「奉教人の死」と「きりしとほろ上人伝」がそのカクストン訳に依拠することはよく知られている。[11]『黄金伝説』「九一　マグダラの聖女マリア」[12]は、いくつかのマグダラのマリアにまつわる伝承・伝説を収録しているが、その中核を成す、よく知られた物語は、イエスの受難後十四年目に（イエスの受難は西暦三十年頃とされているので、その十四年後はすでにティベリウス帝の治世ではない）彼女が聖マクシミヌス、弟のラザロ、姉のマルタ、その忠実な仕え女マルティラ、イエスに眼を治癒された聖ケドニウスらとマッシリア（マルセイユ）に漂着してからの話である。その国の領主と妻は、夢に現れたマグダレナのお告げに従い、聖人たちをもてなす。一方では子宝を授かることを祈願し、領主はマグダラのマリアの説く信仰が真実であるか否かを確かめに、聖ペテロのもとへ巡礼の旅に出ることにする。同伴した領主の妻は、時化の海上で男児を出産し、息を引き取る。領主は妻の亡骸と子供とを岩礁の一つに置いて行く。ローマで聖ペテロに出会った領主は、エルサレムまで共に旅に上り、その聖地巡礼の間に信仰の手ほどきを受ける。二年後、海路帰途についた領主は、先の岩礁近くにさしかかり、子供の遊ぶ姿を見出すが、さらにマグダラの聖女マリアへの祈りによって母親も甦る。マッシリアに無事帰還した二人は聖マクシミヌスから洗礼を受け、この地の異教の神殿の代りにキリストの教会を建てる。その後、エクスの町へ赴き、宣教を行った。以上の話に続けて、マグダラのマリアの荒野への隠棲が語られる。

「ラエタ・アキリア」は、マッシリアの領主と妻の話を、ローマの騎士の妻アキリアの話へと置き換えている（場所は同じマルセイユ）。『黄金伝説』でむしろ回心の主体である領主の役柄を引き継ぐはずの騎士は登場しない。従って領主の船旅、途上での妻の出産と死、聖パウロの導きによる聖地巡礼、妻の蘇生といった一連の出来事は一切取り込まれず、専ら福音を宣べ伝えるマドレーヌの熱のこもった話し振り、子供を身籠ったアキリアの、マドレーヌに対する嫉妬と不安に焦点が当てられる。回心に至るのは、世俗的な母親の立場に満足を見出す自分を最終的に否定するアキリアの方にのみ割り当てられる。『黄金伝説』で続けて語られる、領主とその妻に奇跡を示し、信仰に至らせるマグダラのマリアの話と、彼女が天の国を見るために荒野に引きこもる話とは、本来それぞれ独立した別の話であったのだろうが、アナトール・フランスはそれを因果的に結びつけている。聖女に対する嫉妬から聖女を追いやるような言辞を弄したアキリアが後に回心に至ったというのは、物語の論理としてごく自然に納得できるが、それではそうした言辞を弄されたマドレーヌの方はなぜ荒野に隠棲しなければならないのか。アナトール・フラン

スの描くマドレーヌの語り口は余りに熱烈である。あたかも、イエスと特別の関係（作品の地の文は「崇高な出来事 les divines aventures」と語る）を持ち得た自らを、異郷の貴族の女性に向かって誇示するかのようである。それをアナトール・フランスは宗教的昂揚というよりは、世俗的熱狂と描こうとしたように思われる。芥川は「おしの」でそのようなマドレーヌの姿を、異教徒の武士の妻に次第に熱弁を奮い始める南蛮寺の紅毛人の神父に置き換えている。「基督の生涯」を語る神父が信仰の核心に触れる最も昂揚したところで、それまで「眼を輝かせた儘、黙然とその声に聞き入つてゐ」た武士の妻から一転して冷たく突き放されてしまうのは、マドレーヌがあたかも自己懲罰のようにして荒野に隠遁するのに見合っている。しかし「おしの」の焦点は神父の側でなく、倅の大病のために、即ち「霊魂の助かり」でなく「肉体の助かり」を求めて、あたかも「清水寺の観世音菩薩の御冥護」にでも縋るかのように、異教の教えに縋ろうとする日本人の女の側にある。子を身籠った女性と、倅の大病に心を痛める女性、二人のいわば「母親」が描かれているわけだが、「ラエタ・アキリア」では、ラエタ laeta〈laetus、つまりラテン語で喜ばしきという形容通り[13]、子を身籠った母親（になる女性）の世俗的・肉的な喜びから、受胎した聖母マリアに自らを重ね合わせ、そのことによってキリストの福音に与る宗教的・霊的喜びへの「母親」の変容、それがアキリアの回心の内実であると解釈できるとして、「おしの」の場合はどうだろうか。たとえば、子供の病気を心配し、気も狂わんばかりになる母親に、「尾形了斎覚え書」（初出『新潮』大正六・一、[新]Ⅱ）の篠がいる。百姓与作の後家で切支丹の彼女は、大病の娘里の検脈を頼みに村医者の尾形了斎を訪ねる。設定がまさしく「おしの」と逆である。「娘の命助け度き一念」で「ころび」までして検脈を受けるが、娘は死ぬ。ところが乱心した篠宅に翌日紅毛の伴天連達がやって来て、「宗門仏に加持」等すると、「篠の乱心は自ら静まり、里も程無く蘇生」したという。芥川はこの「死者の蘇生」といういわば奇跡を、信仰ゆえとしているわけでなく、異常なるものに対する好奇心を刺激する、宗教にまつわる不思議な出来事として描いているのであろう。しかし、娘の蘇生に至る過程で篠が「懺悔（こひさん）」を行ったと描かれているのは重要に思える。

「ルカ」の「罪深き女」、マルタとラザロとの姉妹マリア、マグダラのマリア、この三者を混同しているとの批判が作品発表後になされ、短篇集『バルタザール』収録時に作品末尾に「あとがき」の如き一文が加えられた。三人の女性を同一視したのは、学者の説に拠ったのであり、自分の単なる誤解ではないというのである。BP六三七頁注1、2は、ラテン（西方）教会における、三世紀のオリゲネス以後のマグダラのマリア別人説と、二世紀のアレキサンドリアのクレメンス以後の同一人説の論争の歴史を大まかに辿っているが、もともと『黄金伝説』にしても、マグダラのマリアを、王族の出、肉欲三昧の生活に身をもちくずし、〈罪の女〉になった。癩

病人シモンの家でイエスに香油を塗り、すべての罪を赦されたとしている。アナトール・フランスの描くマドレーヌも、「人の子の中で最も美しい方に初めてお会いした時、私は罪深い女 une pécheresse でした」（傍点・引用者）とアキリアに告白した上で、自らの体験として、癩病人シモンの家で、いかに彼女がイエスの膝下に身を投げ出したか、いかに彼女がアラバスター（雪花石膏）の壺 un vase d'albâtre のナルドの香油をすべてナビ（預言者）の尊い足の上に注いだかを語る。『黄金伝説』、アナトール・フランスともに「マルコ」「マタイ」と「ルカ」の塗油の話を接合し、マグダラのマリアに結び付けている。ヨーロッパのキリスト教の伝統の中で形成されて行った強固なマグダラのマリア像は美術史にも反映している。「美術は秘蹟を、まず第一に悔悛の秘蹟を擁護する。自らの過ちに涙する聖ペテロや自らの罪に涙するマリヤ・マグダレーナがこの秘蹟を表わす人物像である。／十七世紀に、悔悛するマリヤ・マグダレーナ像が大いに増えた理由はこうして了解される。通常、この像は単独像であるが、しばしば聖ペテロや他の有名な悔悛者の像とも組み合わせられたにちがいない。彼女は常に、サント・ボームの洞窟に独居する姿で表わされているが、これは十七世紀の初めに、この地方伝説が広く受け入れられていたためである……。／荒野のマリヤ・マグダレーナはこうして、キリスト教美術における悔悛の象徴そのものとなった[14]」。荒野への隠遁が「悔悛」だとして、やはりアキリアの回心にはそのような「悔悛」の姿がモデルとして不可欠だったのではあるまいか。「おしの」の場合、マドレーヌが男性の神父に置き換えられた以上、「悔悛」のモチーフは排除され、そうなるとそれに連なるはずのおしのの回心は起りようもなくなる。

四

「西方の人」〈28　イエルサレム〉で塗油の物語を取り上げながら、芥川は「或女人はかう云ふ彼の為に彼の額へ香油（かうゆ）を注いだりした」と、「マルコ」「マタイ」に限定して叙述し、この「女人」を「ルカ」の「罪の女」とも、マグダラのマリアとも同一視していない。「香油（かうゆ）」は、［元］［西］［普］［前］［新］とも「かうゆ」とルビをふる。〈28　イエルサレム〉のこの直前の箇所（「殿（みや）に入りて…」）ではほぼ［明］の本文通りに引用しているが、「香油（かうゆ）」については、［明］は「香膏（あぶら）」（「マルコ」）、「香膏（にほひあぶら）」（「マタイ」）、「香膏（あぶら）」（「ヨハネ」「ルカ」）と訳し、［文］では四福音書とも「香油（にほひあぶら）」である（「ルカ」七46の二箇所中最初の用例は「油（あぶら）」）。もし〈28　イエルサレム〉のこの箇所のルビが芥川の意図を反映したものとするなら、芥川はこの箇所を単に［明］の「マルコ」「マタイ」から引き写したわけでなく、ことによったら［文］をも参照し、さらには各種のイエス伝や注釈類をも見て、この語彙を書き付けているのかもしれない。ことに「彼は香油を匂はせたまま、（それは土埃りにまみれ勝ちな彼には珍らしい出来事の一つに違ひなかつた。）云々」と続けて記して

いるのは、「さまよへる猶太人」（初出『新潮』大正六・六、［新］Ⅱ）で、「その中にクリストは、埃と汗とにまみれながら、折から通りかゝつた彼〔＝ヨセフ＝さまよへる猶太人〕の戸口に足を止めて」と、ゴルゴタの丘へ引かれて行くイエスの姿を描いている（それと同時に「髪に青い粉をつけて、ナルドの油の匂をさせた娼婦たち」をも点描している）のと同様、ワイルドが「香り高い香油 the odorous spices を疲れて埃にまみれた彼の足に注ぎ」と、『聖書』にはない表現を文学的イメージとして付加しているのに拠っているのではないか。悲劇を目の前にした埃っぽい足と香り高い香油との対照。「西方の人」〈15　女人〉で、イエスとマグダラのマリア（を始めとする「大勢の女人たち」）との「詩的恋愛」を「未だに燕子花（かきつばた）のやうに匂やかである」と形容するのも、そのような嗅覚的に鮮やかなイメージに遥かに響き合っているようにも思える。

もう一点、ワイルドが『聖書』の記述から逸脱している点。マグダラのマリアの香油の壺を七人の恋人の一人からもらったというのは、イエスに七つの悪霊を追い出してもらったという「ルカ」八2（及びその「ルカ」の箇所に拠り後代に付加されたのであろう「マルコ」一六9）の記事における「七つの悪霊」を、「売春婦」である彼女が汚れた肉体的関係を持った大勢の男性、その象徴的数としての七人の愛人と取ったことに由来するのであろう。芥川は先に言及した〈15　女人〉で「大勢の女人たちはクリストを愛した。就中（なかんづく）マグダラのマリアなどは一度彼に会つた為に七つの悪鬼に攻められるのを忘れ、彼女の職業を超越した詩的恋愛さへ感じ出した」（傍点・引用者）と記している。吉田はこの「七つの悪鬼」の箇所に、「神経症だろう（ルナン『イエス伝』）といわれる」と、ルナンの解釈をそのまま当てはめ、浅野も「悪鬼は憑依や病気の原因」と一般的な説明を施すにとどめているが、それだけではない。「七つの悪鬼」に対応する「彼女の職業」というのは、やはり「売春婦」を暗示しているのである。それは次に示す用例と照らし合わせても明らかである。「未定稿」の「ナザレの耶蘇（仮）」[15]（［新］XXII）は、イエスのエルサレム入城をめぐっての二人の羅馬人の対話であるが、「アンチオキアにゐた時分」第二の羅馬人が「大騒ぎをした女」であるマグダレナのマリアが「耶蘇の弟子になつた」というのが話題の一つである。ここでもマグダラのマリアが「売春婦」であることが暗示されているのだろう。もう一例、南京の「当年十五歳の私窩子（しくわし）」＝「売笑婦」を描いた「南京の基督」（初出『中央公論』大正九・七、［新］Ⅵ）の中で、「歿くなつた母親に教へられた、羅馬加特力（ローマカトリック）教の信仰をずつと持ち続けてゐる」宋金花が祈る場面の比喩。「再生の主と言葉を交はした、美しいマグダラのマリアのやうに、熱心な祈禱を捧げ出した」。ここでも芥川は、彼女のイエスへの思いは肉欲にも似た、「燃えるやうな恋愛の歓喜」に等しいと、それはまさしく「詩的恋愛」であると、描いているように思われる。また、「一度彼に会つた」というのも、『聖書』本文は、

復活のイエス目撃の場面は別として、イエスとマグダラのマリアの出会いの場面を描いていないので、ワイルドの Mary Magdalen, when she sees Christ, と照応しているように思われる。「ラエタ・アキリア」の中でマドレーヌが、「人の子の中で最も美しい方に初めてお会いした時、私は罪深い女でした」と語るのとも奇妙に符節を合わせているわけだが、初期の「未定稿」である「暁――小戯曲一幕物――」[16]（［新］XXII）にも同様の用例が見出せる。これは、イエスの十字架刑当日暁の二人の悪魔の対話からなる戯曲である。「己はあのマグダレナのマリアがあいつの説教をはじめてききに行つた時に、これは七つの鬼につかれた女だと云つて、あいつの弟子たちをおだててやつた」（傍点・引用者）。弟子たちがマリアを石で打ち殺そうとする。そこでイエスが言う。「誰でも自分で罪がないと思ふ者が、第一の礫を打つがいい」。しかしさらに興味深いのは、ここに引用されたイエスの言葉とマグダラのマリアとの関連づけである。これは「ヨハネ」八7に記されたイエスの言葉である。姦通の現場で捕らえられた女を民の前でイエスに示し、このような女どもは石で撃つように（打ち殺せ）とモーセの律法は命じていると言う律法学者たちやファリサイ派の人々に対してイエスは言う。「あなたがたの中で罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。He that is without sin among you, let him first cast a stone at her.」。つまり芥川は、マグダラのマリアの「七つの鬼」に「姦通の罪」を重ね合わせているのである。ネストレ―アーラント本文によれば、この一連の箇所は「もともと本文の一部ではなく、かなり初期の段階の伝承に由来し、しばしば教会史の中で重要な役割を果した」箇所とのことだが、よく知られたこのイエスの言葉をワイルドも『獄中記』で取り上げ（Let him of you who has never sinned be the first to throw the stone at her.一一九頁）、さらに「そのように言ったことだけでも生きるに価したのである。It was worth while living to have said that.」と評語を書き付けている。ところがワイルドはこの前頁でも、イエスの別の言葉に対し、きわめて類似した評語を記している。即ち「彼女は多く愛したが故に彼女の罪は許される。Her sins are forgiven her because she loved much.」というイエスの言葉に、「それを言っただけでも死んでしまってもいいくらいであったろう。it would have been worth while dying to have said it.」としているのだが、この「彼女は多く愛したが故に…」（一一八頁）、「あなたがたの中で罪のない者が…」（一一九頁）、そして「罪人は美しい瞬間ゆえに救われる…」（一二三頁）の三箇所は、『獄中記』のイエス論にあって、明らかに関連づけがある。

さて、「彼女は多く愛したが故に…」は、「ルカ」七47が典拠であり、これは先に見た「罪の女」の塗油の物語の続きの場面である（七39～）。「罪の女」の塗油に続けて次のように物語られる。ファリサイ人の家で会食をするイエスに、家の主であるシモンは「万が一にもこの人が預言者であったなら、自分に触っているこの女が誰で、どんな類の女か知り得たろ

うに。〔この女は〕罪人なのだ。」と、胸の内で女を軽蔑しつつ、非難の目を向ける。しかしイエスは、五百デナリオンの債務を帳消しにされた者と五十デナリオンを帳消しにされた者とのどちらが、より多く金貸しを愛するだろうかと一つの譬を語った上で、家に入る時両足にかける水をくれず、接吻もしてくれず、頭をオリーブ油で拭いてもくれなかったシモンと女の行為とを対比し、次のように言う。「このために、私はあなたに言う、この女の罪は〔たとえ〕多く〔とも〕赦されている。〔それは、〕この女が多く愛したことから〔わかる〕。少ししか赦されない者は、少ししか愛さないものだ。」[17] Wherefore I say unto thee, Her sins, which are many, are forgiven; for she loved much: but to whom little is forgiven, the same loveth little.」(七47)。イエスの言葉の前半部、ワイルドは which are many, という挿入句を省き、forgiven her とする程度で、ほとんど同一である。[18] 荒井献は「マルコ型の伝承とルカ＝ヨハネ型の伝承があって、ヨハネ福音書にはマルコ型の伝承も入っている」と塗油の挿話を整理する。[19] さらに金貸しの譬話のテーマは「多く赦してもらったほうが多く愛する」＝「赦しが愛に先行する」ということ、ところが英訳もあわせ示した箇所（七47）のテーマは「この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない。」＝「愛の行為が赦しに先行」するということで、二つのテーマが対立している。そして前者の方が「伝承のモチーフ」、後者が「ルカの強調しようとしたこと」であるという（一二九頁）。つまり、「マルコ」「マタイ」は、イエスの頭に油を注いだ女の行為を（「キリスト」とは「頭に油を注がれた者」（傍点・引用者）の謂いなので）「パーフォーマンスによるキリスト告白」と意味づけるのに対し、「ルカ」は女の塗油を受難物語の文脈から切り離し、愛ゆえの罪の赦しの物語に置き換えたのだと荒井は解釈する（一二七頁）。そう考えるなら、ワイルドが語っているのは、さまざまな「罪の女たち」、「ヨハネ」の「姦通の女」も「ルカ」の「罪の女＝売春婦」も、彼女たちは溢れるばかりの愛ゆえ、その美しい一瞬ゆえにその罪から救われる。その「罪の女たち」の美しい一瞬はイエスに香油を注いだマグダラのマリアに象徴される、そのようなことなのではないだろうか。

これにすぐ続けてワイルドはイエスの「詩的正義 poetical justice」を語る。これは言うまでもなく、「西方の人」〈20 エホバ〉の「クリストは…」の「詩的正義」の典拠とされる箇所である。そしてさらにこれに続けてワイルドは「乞食は不幸であったがゆえに天国へ行く。The beggar goes to heaven because he has been unhappy.」と述べる（一一八頁）。西村注419は「ルカ」一六19-31を典拠に挙げている。「金持ちとラザロ」の譬話の箇所である。ここは、「福音書」には珍しく「死後の世界（陰府、黄泉＝よみ）」を描いているが、[20] ある金持ちの門前にやってくる乞食のラザロ（ptōchos＝beggar）、彼は死んでイスラエルの祖であるアブラハムのす

ぐ側に連れて行かれる。一方、金持ちは死んで、苦しみに苛まれ、アブラハムにとりなしを頼むが、アブラハムは「子よ、お前はお前の生きている間、自分〔だけ〕の良きものを受け、ラザロは同様に悪しきものを受けたことを思い出すがよい。しかるに今ここでは、彼は慰められ、お前は悶えるのだ」云々。金持ちは何とかアブラハムにすがろうとするが、願いは聞き届けられない。

しかしワイルドが念頭に置いているのはここだけではあるまい。beggar を (the) poor と取るなら、たとえば「マタイ」五から始まる有名な「山上の垂訓」の冒頭（五3）、「幸いだ、心の貧しい者たち、／天の王国は、その彼らのものである。Blessed are the poor in spirit: for their's is the kingdom of heaven.」と関連づけることができるだろう。「ルカ」にも同様の記事は見られるが、こちらは、「マタイ」とは対照的に、イエスが山から下りて（六17）の説教である。そして「幸いだ、乞食たち、／神の王国はそのあなたたちのものだ。Blessed be ye poor: for your's is the kingdom of God.」（六20）と、表現はよく似ていながらも、人称の違い（三人称と二人称）、heaven と God との違いから、より「マタイ」の本文の方が、ワイルドの本文に投影されているのかもしれないが、いずれにしてもネストレ―アーラントの本文に従うなら、「マタイ」五3の the poor も、「ルカ」六20の poor も（ともに名詞）、ptōchoi、つまり文字通り「乞食（複数）」であり、ワイルドの表現する beggar に通じる。同じネストレ―アーラント校訂本二七版を底本とする〔岩〕の脚注でも、「マタイ」五3の「心の貧しい者たち」に対して、「直訳すれば、「霊において乞食である者たち」。自分に誇り頼むものが一切ない者の意。」（I一〇五頁注七＝佐藤研）、「ルカ」六20の「乞食たち」に対して、「普通、この原語（ptōchoi）は「貧しい者たち」と訳されるが、原義は「乞食」、つまり通りでもの乞いするほどの赤貧の者を示す。」（II三六頁注一＝佐藤研）とある。しかし、獄中のワイルドにとっての『神曲』読書の重要性を考えるなら、この箇所は『神曲』「煉獄篇」第十二歌とも関連しているはずである。高慢の罪を浄める人々が歩む煉獄山の第一の環道を辿るダンテとウェルギリウスの耳に、「心の貧しき者は幸なるかな *Beati pauperes spiritu!*」（一一〇行目）という「えもいわれぬ美しい」歌声が聞こえる。よじ登って行くダンテの額に刻みつけられた七つのP（罪）の第一（順序としてだけでなく罪の重さとしても）が消され、高慢の罪は浄められている。ここにもやはり「悔悛」のテーマを読みとることができよう。

芥川が「西方の人」〈18　クリスト教〉で「クリスト教はクリスト自身も実行することの出来なかつた、逆説の多い詩的宗教である」と言うときの「逆説」の内実とは、イエスが「乞食」に対する価値観を見事に転倒してみせたことも含まれるだろう。しかしおそらく「逆説」＝「価値観の転倒」は「乞食」に対してだけではあるまい。芥川は特に「続西方の人」において、「売笑婦や税吏や癩病人」〈2　彼の伝記作

者〉、「売笑婦や税吏や罪人」（〈21　文化的なクリスト〉）、「貧しい人たちや奴隷」（〈22　貧しい人たちに〉）を一群に括って呼ぶが、彼等は「乞食」と同等である。このような括り方は『聖書』の表現そのままではない。「税吏娼妓」（「マタイ」二一32）（［文］では、「取税人と遊女」）「妓」（「ルカ」一五30）（［文］では、「遊女」）、「税吏（と）罪ある人（者）（ども）」（「マタイ」九10-11、一一19、「ルカ」七34、一五1）、「癩病の者」（「マタイ」八2）「癩病人」（「マタイ」一一5）「癩者」（「ルカ」七22）「癩［＝癩］者」（「ルカ」一七12）（以上すべて［文］は「癩病人」とする）といった、当時特にファリサイ派の人々から価値がない者、嫌悪すべき者として虐げられていた人々を芥川なりに包括した言い方である。これらの箇所は「マタイ」と「ルカ」の並行箇所が多いが（「税吏」については「ルカ」に頻出する）、悔い改めと関連している場合が多い。「売笑婦」は、ここでもやはり単なる［明］または［文］からの引用だけでは出て来ない表現である。芥川の中で生きたイメージとなっていた「女人たち」、そのような、「西方の人」〈15　女人〉で描かれた、マグダラのマリアを代表とする、ことによって「罪の女たち」でもある「大勢の女人たち」も、芥川にとって彼等の内に含まれるのかもしれない。そのような文脈から『神曲』の「姦通の女」であるフランチェスカについての芥川の表現も読まれるべきであろう。

（1）『新潮日本文学アルバム13　芥川龍之介』（新潮社、一九八三・一〇）九三頁の原稿の写真が「「西方の人」（右）と「続西方の人」の原稿」とあるが、「（右）の原稿」は、おそらく「続西方の人」21～22の原稿である。

（2）『日本近代文学館所蔵資料目録2　芥川龍之介文庫目録』（日本近代文学館、一九七七・七）に見える☆The New Testament of our Lord and Saviour Jesus Christ. Oxford, [printed at The Univ. Press], 1902. は関口『ン』の人を見よ』三〇～三一でも紹介されているが、同じ関口「一冊の聖書の背景」（『キリスト教文学研究』第十四号、一九九七・五）一三七頁上ではRVと指摘されている。なお同目録中、書名の前に記された☆は、芥川の「なんらかの書き込みのある」ことを示している。

（3）『神曲』の日本語訳は平川祐弘訳『神曲　新装版』（河出書房新社、一九九二・三）による。『神曲』イタリア語本文はDante Alighieri, La Divina Commedia, testo critico della Società Dantesca Italiana, Ulrico Hoepli, 1989. による。

（4）『芥川龍之介文庫目録』。

（5）〔新〕XVII書簡番号115。佐藤によれば、芥川蔵書のDe profundis裏表紙見返しに「千九百十一年［明治四十四］八月八日読了」とあるとのこと。なお同書簡中、ダヌンチオの戯曲（「フランチェスカの悲恋をかけるMELODRAMA」）「フランチェスカ・ダ・リミニ」（芥川

は「グミニ」としているが、書簡をいずれかの全集に組む際、「リ」を取り違え「グ」としたのではないか）の英訳に触れている。

（6）Magdalenも、AV、RV、RSV、その他の『英訳聖書』に当たってみたが、いくつかの例外を除き（New English Bible及びその改訳であるRevised English Bibleの二種の現代のイギリスの訳はMary of Magdalaとする。また翻刻版に当たってみると、AVも「ルカ」二四10のみMary Magdaleneでなく Marie Magdaleneとする）Magdaleneである。ワイルドは愛着の深い母校オックスフォード大学のモードレン学寮Magdalen Collegeの綴りを採用している（ちなみに、ケンブリッジ大学の方はMagdalene College）。西村注46、175も参照。

（7）一八八五年五月二十日付E・W・ゴドウィン宛書簡、SL六二頁参照。

（8）『新共同訳　新約聖書注解』I（日本基督教団出版局、一九九一・七）三〇六頁上＝三好迪。

（9）［岩］II四六頁注二＝佐藤研。その他、「《罪深い女》は娼婦であろう」（『新共同訳　新約聖書注解』I三〇四頁下＝三好迪）等、同様に解釈している注釈が多い。

（10）Anatole France, Oeuvres, Bibliothèque de la Pléiade, t. 1, Gallimard, 1984.（以下、BPと略記）のマリー＝クレール・バンカールによる「ラエタ・アキリア」への注（一三〇七～一三一一頁）参照。

（11）カクストン訳については未調査。BPの『シルヴェストル・ボナールの罪』の注（主に一一三三～一一三四頁参照）によれば、フランス自身は一八四三年刊のシャルル・ゴスラン編訳『黄金伝説』を参照しているとのこと（作品中の『黄金伝説』の写本なるものは虚構であるにせよ）。

（12）今回は専ら前田敬作・山口裕訳『黄金伝説』第二巻（人文書院、一九八四・一）による。

（13）BP六二九頁注1は「詩篇」一二二（VG一二一）等と関連づけている。

（14）エミール・マール／柳宗玄・荒木成子訳『ヨーロッパのキリスト教美術　12世紀から18世紀まで』（下）（岩波文庫、一九九五・一一）二三七～二三八頁。『新潮世界美術辞典』（新潮社、一九八五・二）「マグダラのマリア」、柳宗玄・中森義宗編『キリスト教美術図典』（吉川弘文館、一九九〇・九）「マリア　マグダラ（マグダレナ）の」（三〇〇～三〇一頁）等にも同一視（西方教会における）に由来する絵画的表現についての記述がある。

（15）大正四年頃の執筆と推定（［新］XXII「後記」）。［新］XXIIは、『芥川龍之介資料集　図版2』（山梨県立文学館、一九九三・一一）に収録の「151〈ナザレの耶蘇〉草稿」（二二四～二二六頁）を「ナザレの耶蘇（仮）」として葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』（岩波書店、一九六八・二）「基督に関する断片」中の「マグダレナのマリア」

（編者による仮題）とほぼ同じ形、即ち草稿1—1→1—2（以上Ⅰ）→2—1→2—2→1—3→1—4（以上Ⅱ）と配列し、2—3、2—4は「PIETA」四四四頁本文一一行目～四四六頁一行目に組み入れている。これは妥当であろう。また、『芥川龍之介資料集　図版2』の「139「PIETA」草稿」の草稿4（一九七頁）は「ナザレの耶蘇（仮）」四〇五頁本文六～九行目（「んで……兼ねない」）の別稿である。

(16) 実際には回覧雑誌に掲載されたもののようだが（〔新〕XXII「後記」）、作品末尾に大正四年十月十六日の日付がある。関口『この人を見よ』五〇～五一頁参照。

(17) 日本語訳とはかなりニュアンスが違うようだが、それは日本語訳の「このために」に当たるhoti という接続詞（英訳では for）の取り方の違いからくるという。実際、口語訳では「この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされている」とある（以上、〔岩〕Ⅱ四七頁注一〇）。この箇所のみについて言えば、AV、RVの訳をRSV, first edition of 1946. は、Her を小文字にする程度で、ほとんどそのまま受け継いでいる。従って、田川建三が『書物としての新約聖書』（勁草書房、一九九七・一）第四章で指摘するように、口語訳はかなりの比重でRSVに依存していると言える。

(18) 実際、AV、RV本文でも、福音書中「マルコ」一一5、9（その並行記事である「マタイ」九2、5、「ルカ」五20、23）、「マルコ」四12、「マタイ」一二32（その並行記事である「ルカ」一二10）にワイルドと同様の構文の用例を見出せる。

(19) 荒井献『新約聖書の女性観』（岩波セミナーブックス、岩波書店、一九八八・一〇）一三二頁。

(20) 佐藤によれば、芥川は『英訳聖書』のラザロの話の三箇所、「ルカ」一六22中間部、26後半、29一部に赤インクでアンダーラインを引いているという。芥川のある種の「地獄」観を見ることができるようにも思えるが、別の機会に論じたい。

〔参照の「西方の人」「続西方の人」の本文及び略号〕

〔元〕：『芥川龍之介全集』第六巻（岩波書店、一九二八・八）

〔西〕：『西方の人』（岩波書店、一九二九・一二）

〔普〕：『芥川龍之介全集』第六巻（岩波書店、一九三五・一）

〔小〕：『芥川龍之介全集』第十二巻（岩波書店、一九五五・四）

〔前〕：『芥川龍之介全集』第九巻（岩波書店、一九七八・四）

〔新〕：『芥川龍之介全集』第十五巻（岩波書店、一九九七・一）

なお、「西方の人」「続西方の人」を含めて、芥川の作品本

文の引用はひとまず〔新〕により、巻数をローマ数字で記す。

〔言及の「西方の人」「続西方の人」の注釈類〕

吉田：『日本近代文学大系第38巻　芥川龍之介集』（角川書店、一九七〇・二）

浅野：〔新〕注解＝浅野洋

佐藤：佐藤泰正「テクスト評釈「西方の人」「續西方の人」」（『国文学』一九八一・五）

〔言及・引用の『聖書』及び略号〕

〔明〕：「マタイ」「ルカ」は聖書図書館蔵『引照　新約全書』（米国聖書会社、一九〇四・三）、「マルコ」「ヨハネ」は同図書館蔵『新約全書』（米国聖書会社、一九〇四）

〔文〕：『旧新約聖書　引照附（小形引照つき文語聖書）』（日本聖書協会、一九七九）

〔口〕：『聖書（小形聖書（口語））』（日本聖書協会、一九八六）

〔岩〕：荒井献・佐藤研責任編集『新約聖書』Ⅰ～Ⅴ（岩波書店、一九九五・六～一九九六・八）

AV：The Oxford Large Print Reference Bible, Authorized King James Version, Oxford U.P., repr. 1993.

RV：Revised Version の本文を直接参照できなかったので、Nestle-Aland, Novum Testamentum Graece, 27th edition. と Revised Standard Version（＝RSV）, 2nd edition of 1971. との対訳である Nestle-Aland, Greek-English New Testament, 8th revised edition, Deutsche Bibelgesellschaft, 1994. のアパラトゥス（校異表）により推定した。ただし、英訳のアパラトゥスについてはあまり厳密とは言えない。

VG：Robertus Weber, Roger Gryson, Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem (Vulgata), Deutsche Bibelgesellschaft, 4. 1994.

〔『獄中記』の本文（初出・完本）及び略号〕

FC：The first collected edition of the works of Oscar Wilde 1908-1922, ed. Robert Ross, Dawsons of Pall Mall, 1969.

＊ De Profundis, first published by Methuen and Co. 1905, first issued with additional matter in 1908. の復刻版。

PC：De Profundis and Other Writings, Penguin Classics, 1986.

SL：Selected Letters of Oscar Wilde, ed. by Rupert Hart-Davis, Oxford U.P., 1979.

西村：西村孝次訳「完本・獄中記」「ダグラスへの手紙」「ロスへの手紙」（『オスカー・ワイルド全集』Ⅴ、青土社、一九八一・三）

〔その他の参考文献〕

宮坂覺編『芥川龍之介全集総索引　付年譜』（岩波書店、一九九三・一二）

（新潟大学教育学部）